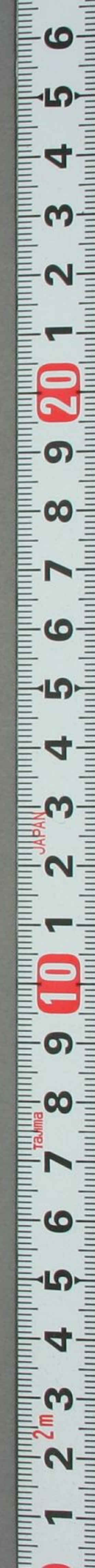


兼好傳紀  
上

^ 2  
1378  
1



八二  
1378  
1-2

門  
1378  
1



兼好傳紀校華鈔序

吉田兼好者卜部兼顯子大織官十八世孫也  
仕後宇多院而為武衛次將正中元年帝崩御  
後截髻入修學院以俗名即為法名其為人博  
覽而探儒入佛識公る且好老莊詩家集倭歌  
者二條家之閉業而入五代勅撰世稱セシ四天王  
所著徒然草家集憤世俗觀如幻有逝水不レ含  
晝夜嘆而興感人情抒我見所謂華人筆隨筆

類也尋常清貧而雅與頓阿善嘗乞米及錢於  
頓阿因以折句見意云々又與清閑寺道我為友  
每遊高師直之家皆以和歌走一日師直託兼  
好作艷簡兼好使書深草隱士述之嘗竊管見  
筆艷書區々說讀耕林先生者信一生過錯也  
北村氏助語之云世間凡俗誤一生之輩異日  
談也古曰苟有過人必知之蹈雪云譏兼好之  
輩者章段之不好色男子者王卮無當之語未可

有通曉者也尤政云若物我相忘然及遇媼女  
之魅感則秋霜烈日凜然不可侵也可謂和而  
介者皆其隨所好樂而已予未暇談論也抑寂  
寞草傳世久矣古往今來為註解之十有餘云  
觀為其書者猶頗為歌書之見或浸淫釋氏之  
道未能得兼好骨髓者乎物中至本傳者混然  
而如無統紀也傳曰聞伯夷之風者頑夫廉懦  
夫有立志聞兼好風者學兼好和介者乎故忘

其固陋間亦附已意而詳傳記名之按華鈔而  
鍔粹付小兒輩以止其啼者也于時貞享二丑  
年臘月上旬倉田氏松益字序々

恙好傳記之序

春は園り咲きつる花の如く秋の種も  
すく出ろ色く此中み吉田は恙好くを  
は終く草ならんよ糸ゆつるふ多もた  
くてそのまもろこし乃みれををさひ  
り此園りの恙は湯法をうへひ花を何  
か割ぬつてなうぬ世と怪くをさひ山乃  
ふり立さぬとぬして一向は安ん  
と我孫ふ安ん倉田松益のぬ一  
さあさ梢の花り雨りむりて月と



多れあえ—窓の中みだぬ世れ人と友と  
すれの傳意好ううのいあ—とあふ山教  
ふあ系と拾ひ集て傳記後華とる好  
静けう窓乃中み解ゆふそん我歌ひて  
む—とあふ—のあふやあ—ぬ

### 卜部系圖

タイシヨクシカミナリ  
 一大織冠鎌足イミミ 意義イシ 清キヨ 諸モロウラ 魚ウヲ 智チ 治チ 磨モ  
ヒラノロ  
 日ヒ 良ラ 磨モ 豐トヨムシ 宗ムネ 好ヨシ 真サ 兼カ 延ノブ 兼カ 忠タカ 兼カ 親カタ  
トヨムシ  
 兼カ 政シ 兼カ 俊トシ 兼カ 康ヤス 兼カ 貞サダ 兼カ 茂シゲ

鎌足十七世

兼名

兼顯

慈チ 遍ヘン

大僧正南朝詔

兼雄

民部大輔從上

兼直下略

兼好

左兵衛佐以  
俗名為法名

卜部姓トベノケ 仲哀ナカアハ 天皇ミコ 御宇ミコノトキ 雷カミナリ 大臣オホナカ  
十代見屋根 人達トコナリ 雷カミナリ 下シタ  
 故始給卜部姓又常盤大連トコナリ 梶屋根ツルギ 奉授中臣サツケナカノミ 被ヲ  
 於欽明天皇於是改卜部姓而給中臣姓天智テンチ  
 天皇御宇至大織冠給藤原氏大織冠御子ミコ 意イ  
 菟磨又從中臣姓神護景雲二年意義磨イシカガ 子清キヨ  
 磨被拜中納言斯時加給大字又改大中臣ナカノミ 自ヨリ  
 清磨四世至日良磨又給卜部姓自爾ヨリ 以來ヨリ 代ヨリ  
 代至今吉田家不改ツキ 又改ツキ 鈔シヨ 說ワタシ  
テツレキ 徹書記云カクニ 多オホク 好コトク 八ヤチ 酒サケ 乃ノ 志シ 乃ノ 志シ  
トイ 宿直ヤクチ 乃ノ 志シ 乃ノ 志シ  
カクニ 徹書記云多好八酒乃志乃志  
トイ 宿直乃志乃志乃志  
キヨクタイ 乃志乃志乃志

ケ

五

有り死後宇多院崩逝乃後道世志有り也  
多敷心此因縁也 後分の秋仙あり阿婆運津  
舟無好とく其以乃四天王といへり 眞徳抄出

長抄云瀧口藏原鈔云六位侍可然之輩補  
之又云堪武勇之輩可補之云々禁秘抄曰瀧口  
大略同所衆 職原首書云禁中侍之官也以  
源平重代侍奉之其番所在清涼殿良遠也寛  
平御宇被置之員數二十人其中上臈三人下  
簡月十日勤番

長抄云 後宇多院者人皇九十代亦號大

覺寺諱世仁龜山院太子也母皇后藤原倍子  
號後京極院左大臣實雄女也文永十一年三  
月廿六日即位時九歲九條忠家攝政後深草  
院号本院号龜山院新院建治元年二月蒙古  
杜世忠來同年三月行華石清水賀茂  
○弘安三年元使殺杜世忠同四年五月廿一  
日蒙古兵船六万艘來于筑紫八月朔日神風  
吹破賊船七日筑紫官兵攻殺其殘兵于八角  
島十方兵還者僅三人同年十月禪位德治二  
年七月御出家法名金剛性元享四年六月廿

六日崩壽五十八歲葬蓮華王寺治世十三年  
 愚鈔傾阿者小野宮大納言能実後繼也二  
 條為世々の門才めて古今傳史の一流なり為  
 ゆに新拾遺集撰ひめて味終てうせ給ふは既  
 續くといへ利所著井蛙抄五家集と茶庵集  
 といふ時代後宇多院後光嚴院之比法師也至  
 貞享二乙丑年三百余年  
 愚鈔淨辨者後宇多院弘長弘安人也至  
 貞享二乙丑年四百一年  
 愚鈔云慶雲者後宇多院人淨辨字法印風

雅集入カ至テ貞享二乙丑年四百一十年余  
 ○增ホ補ホ鉄テ推ツ云ニ為ル好ク鉄ハ二條ノ存ルの門ノ才メて凡  
 雅集新ニ千載ニ集シ新ニ拾遺ニ集シ新ニ後拾遺ニ集シ新ニ續シ古  
 今集ノの初ニ撰ル母ニ鉄ノ教ヲ多く其外ノ台ノ母ノをハ海  
 又家集一巻ヲ世ニり板ヲ行スる集ノ母ノ横ノ河ノはハ修ルは  
 及シくハ多ク利ニ又シ双ニ乃シ愚ノ母ノ母ノをハ海ノりテるハり  
 母ノ横ノとハ任スるハり  
 契リとシくハ屯トとシるハひノ愚レれハ母  
 ありれいハくハ世ノのハとシるハん  
 愚抄ノ凡ニ雅集十七世ノのハれてハキソクハ海ト



いふ酒を色傳ふとて 慈好法師

慈抄母 人皇第九十四代後醍醐天皇正中

二年撰ス

行ひいふ川本多れあささぬ後の

うめてやしへ交紳形色くは

○新千載集十六建武二年内裏千首秋母巻と

路りり〜續て有利りり時春植物といへるものと

慈抄母 人皇九十九代後光嚴院延文四年撰ス

久々の雲井のころにいほり日此

ひくり母にほりやよりけりけり

同十八雜字下

まめんま〜とせりりりりりり

おのい〜ま〜れ山里とく那

同十九慈好法師の母身まうりりふりり一め

くりれははり乃日さけおのそえとく尸はり

り〜りり 前大弼云為定

慈抄母 為定者順徳院建暦二年五月十七

日率大中臣神祇少副為仲子也

別母〜秋をりりりりりりりりりり

時〜もあれとさうりりりりりり

久一

善好法師

めくりあふ秋しりいそく船くたれ  
河舟をりよはをさうりつ

新拾遺集六冬部

忍抄冊

人皇九十九代後光嚴院

康安年中撰

わ鴨のほろふ翅みみあて

くハ毛乃糸やケ然厚まん

新才九西羈務部

膝のりらいくタられみ待あく

山のくくくく月とまのらん

同十一忍久忍

忍山まきこくまにみらもう那

ありぬり流ハ人もくそくま

新後拾遺集八炭竈を

忍抄冊 人皇百一代後小松院至徳元年撰

すみうはも年のさむまみあう金ぬ

くありやねれつり本なるらん

同才九離別奇

於於よみ来れまくらの愛とくに

たのむくなく山凡らうく

同十六雜奇

後の世をならけぬほろりあはれる

あはれうきあはれぬ袖はぬきば

新續古今集六百首奇なり時室草

鳥抄中 人皇百三代後花園院永享十年撰

多花の形をこれ等集ふるをわかれり

あはれうきあはれの風うきむらあ

同十一思恋を

みくむいけのうきこれあはれのみくも

あはれあはれ人なりあはれあはれを

同十二玉津嶋の社中なりなりあはれ中母

新恋をいかにせん神のうきあはれ後

あはれあはれあはれあはれあはれ

同十三恋歌

こぬ人ともあはれありあはれの松山ハ

いくよかみあはれあはれあはれん

同十四絶恋を

うきあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれ



同書七 雜守

のうまをえぬおひうれ森のもみら葉ハ  
 散りひくふおひかうりうりう

の二十六首ハ古の五代ノ集オカクハ

意好法師自撰二首

あまのこゝろのいぢりうりうりうりう  
 りふふふふふふふふふふふふふふふ  
 りふふふふふふふふふふふふふふふ  
 又意好法師のりうりうりうりうりう



世の中をわたりくまなく今を  
い波れ鳴戸を波風もね

高野山金剛三昧院母慈好自覺此經冊

五教あり是は武人養ふ南無釋迦佛今

身念利より身をたたく各母あり候しひり

時より慈好もよめふなりと直義朝臣を  
後と書り其弁云

ほつえとくくや色初もと都云  
を山母のこは何たりぬらん

香よ白ひたけり色母ありはきて  
このりれ花や春ははくらん

即ちより寤意母いり佛より  
ひとはつゆの玉とてゆらん

は葉の戸母いりり母を秋の月れ新

とよ人もなりくさす人もね

武義師や智少りはりはる母に

まよりいのもんはありとてりり

五抄母人のふも多しとい二條後ら基云

の清作れ玉集風体抄母慈好八人の口あま

あねを記しあねを智利家集としこ  
ありとて事く自筆の本加賀國守り

し母ありとるんましく 盤斎抄に  
愚抄母○横河ひえの山のふもと大原より八束也

新古今雜下

天曆御製

けりり雲の八重の川かきこれ  
横河乃水はすみよりかきん

○兼好法師家集母横河みすも侍のしこ  
靈山院より生か供の式と書約一奥より  
後撰集

わきも人ももてせたりとて

○雙思 東より一里修りけ思は法金剛院のふも

けち中母池ありなりひの池より祝を

○風雅秋下

色く母ありひの思れ初みま  
秋のころむ乃り来あり思は

○後撰恋四

續人不志

おねくハ君とありひの池より  
男をまけ侍とも人よませめ

本朝遷史曰兼好者兼顯子也後宇多院北面之  
臣也任左兵衛佐帝崩之後  
有文才善倭歌當時與頼阿淨辨慶雲其相比

世稱和歌四天王也云々曾過本曾路有詠歌且  
 暇日作倭語草子號徒然草其憤世俗觀生死  
 感時序摸風景說人情抑私見固是倭文之尤  
 者也又贊云吁徒然之草乃華人筆隨筆類也  
 技桑隱逸傳云兼好者卜部兼顯之子大織冠  
 之苗裔也博覽無不窺能經和語巧作和歌  
 時論為少有能體掌仕建治帝為武衛次將正  
 中元年帝升遐兼好乃削髮入修學院  
 愚抄中家集之修學院といふ所みよりの侍比  
 のれてもは家のうらにほれわりのめめ

とくくわつりのしつりう人衆  
 のつれこしあそあしをほせよと  
 心しものくまあためしハ  
 能をくすくすのあはなをれも  
 のつれしものいらぬとけり  
 後上横川深匿影迹兼好居常清貧雅與頓阿  
 善掌乞米及錢於頓阿因以折句歌見意頓阿  
 亦不艱答又以歌而少饋錢而已  
 愚抄中續草庵和歌集云世の中をばけつなり  
 さらしはあほうなりとの稱をまうえ世にを





岐